Tokai Fubokon Letter

東海中高父母懇談会発行
教員代表：杉浦一輝
父母代表：加藤佳世
2021／1／27（水）
No.6　北村先生特集

先生特集について

東海の教育を直接支えて下さっているのは、ご存知の通り様々なタイプの優れた先生方。そんな素晴らしい先生方をご紹介し、より深く東海を知って頂こうという企画です。

前半：北村先生ご自身について
後半：海外研修について（必見です！）

北村雅臣先生

高校英語科
山岳部とラグビー部顧問
昨年度卒業生は6年間持ち上がり
学年主任を務める
ニュージーランド研修の責任者
岐阜県瑞穂市（旧本巣郡）出身

中高　バレー部（中学ではレギュラー）
高3時にラグビーW杯を見て、大学に行ったらラグビーをやるしかないと思う

大学　臨床心理学を専攻、ラグビー部入部
留学生とのキャンプで英語に興味を持つ
母校で教育実習も経験

大学院　臨床心理士資格を取るために進学
児童相談所・クリニックで非常勤の勤務

前任校　（ターニングポイント①）縁あって英語教員になり、充実した日々を過ごす

留学　（ターニングポイント②）退職し、アメリカ・ボストンの大学院などで英語教授法を学び、帰国後は元の学校へ戻った

東海　以前とは違う環境の教壇に立ってみたいという気持ちから東海へ
才能と可能性あふれる男子たちに、自分が学んできたことが何らかの形で貢献できるのではないか、と思った

昨年２月の高２懇談会、当時高3学年主任として高3の１年の過ごし方などをお話しされた際、流行語大賞ともなったラグビー日本代表のスローガンになぞらえ、東海を「One Team」と例えられました。穏やかな語り口で生徒・教員（そして父母も）一丸となって受験に立ち向かってきた様子を軽妙に説明するや、その実内容はとても熱く、あっという間に北村ワールドに。このギャップは一体どこから来るものなのか、お母様方の証言を集めてお話を聞いて参りました。

―教師になるきっかけは？

父が教師であったが、高校生までは反抗期もあって絶対教師にはなるものかと思っていた。大学では臨床心理学を専攻。大学院に進んだが、心理学でのキャリアビジョンが上手く描けなかった。（ターニングポイント①）一方大学時代に経験した母校での教育実習は特別なものに感じていた。生徒と過ごす時間は発見と驚きと喜びの連続で、充実感を得られた。心理を学んだことは教師としてやっていくのに活かせない筈はないと考え、縁あって中高一貫の前任校へ。

―教師を始めてどうでしたか？

振り返るととても瑞々しい、新鮮な日々を過ごしたと思う。生徒と一緒に過ごす時間の楽しさ・心地良さ、高揚感からスタートしたと言ってよい。部活動（サッカー部）においても、難敵に勝利するなど一緒に成功体験をした時などは、20代という若さもあってか、自分の中に熱いものがカァーッと込み上げてきた。

ラグビーW杯2019
日本代表キャプテン
リーチ・マイケル選手

―留学したきっかけは？

受験用の英語を学ぶ以外は特に何もしてこなかったため英語の教員を始めてから英語力の不足を感

じ退職した。（ターニングポイント②）人生は一度きり、行ける所まで行きたい気持ちと、学びたいと思う先生がいることからボストンの大学を選んだ。自分で経験しないと分からないタイプなので、教員になって初めて何が必要かが分かり、より深く学ぶようになった。

―先生が尊敬する方は？

一人目は大学の哲学の先生。学問や芸術に向き合う際の謙虚で真摯な姿勢、周囲を自発的学びに巻き込む熱、傾聴と熟考と忍耐の重要性、といった人生のさまざまな局面で指針になることをすべて教えていただいたように思う。もう一人は精神分析で有名なフロイト。ただ毎日人の話に忍耐強く耳を傾け、その語りの中から深い意味を見出し、それを自分の言葉で理論として体系化していく地道で妥協のない営みから多くを学んだ。

常に生徒や保護者に寄り添い、誰に対しても、どんな事でも、きめ細やかにご指導くださいました。

―運動 ・ 登山について

部活を中心にいくつかの運動を経験した。個人的にはコロナ禍で走り始め、11月に初のフルマラソンで完走。自転車通勤。体を動かすことは好き。

山登りは地味で単純だが、基本はリスク・マネジメント。様々なアクシデントが起こるのは人生の縮図のように思う。帰ってくると日常生活の当たり前がすごくありがたく、新鮮で、謙虚な気持ちになれる。コロナ以前は寒くない季節に山岳部で月1の「山行（さんこう）（日帰り登山）」。年5～6回。合宿では3000m級に登る。個人的には北アルプスの槍ヶ岳が一番印象に残っていて、そこは妻との出会いの場でもあり、今の家庭の原点とも言える。登り切った頂点の360度の眺望は非日常の極致。

3年前山岳部で槍ヶ岳の「穂先」に登頂した時

―東海に来て

前の学校とは何もかもが違っていた。まず普通に話をしても誰も（生徒も教員も）聞いてくれない。聞いてもらう（相手の関心を引く）ためには、自分の中にそれなりのものを持っていなければならないことを痛感した。安っぽい伝える技術は意味がなくて、「伝える価値がある」と思う言葉を「確信」を持って伝えることが大切。常に何が大事なことなのかを自然と意識させてくれる職場。

2年前の記念祭クラス企画

―東海の良さ

色々な能力と興味を持った生徒（先生方も含む）がたくさんいて、ありきたりの枠では収まらないとんがりを見せるこの集団を、ひとりよがりに束ねようとしたり無理に引っ張ろうとしたりしてもうまく行かない。彼らがこの先それぞれ進むであろう世界を自分も楽しみながら驚いたり、応援したりする。ありきたりの教師ー生徒の関係には収まらない関係があちこちで出来上がっていて、そこに刺激を受けている。

―英語の添削について

添削はお互いにとって学びの機会。生徒は自分のベストをさらけ出して提出してくる。その気持ちに応えるべく、自分なりに良いと考えている表現の仕方をできるだけたくさん提供したいという思いがある。その全てが必要ではないかもしれないけれど、どこかが引っかかって、残って、気づきに繋がってくれることを願っている。また同時に心がけているのは、生徒の解答と全く違う正解を見せても噛み合わず得るところも少ないため、彼らの解答を下敷きにしてどう洗練したら良いかを示すこと。いわば片足を答案に残しつつ、もう片足をひとつ上の段階に進めていく感じ。

生徒の想像以上の添削をしてくださった。とても丁寧で、息子の信頼は厚いです。

―教師として気をつけていること

平たい言葉で言うと「リスペクト」。生徒はそれまでの人生で色々なものを背負い、抱えて、吸収して生きてきている。自分の尺度に単純に当てはめないように、一旦そのものさしをかっこに入れてどうしてそうなったのかを考えるスタンスは忘れないようにしたい。

―東海生に求めることがあるなら？

人間は不完全で欠けていることだらけ。そこを潰すことにいくら精力を傾けても、超人にはなれない。コレだ！と思う好きなことをとことん突き詰めるのが自然

で良い。必要なことをあえて挙げるならば、そんな風に自分で選択して時間とエネルギーを注ぎ込む環境を作ってもらえていることへの「感謝」と、自分と同じ興味や価値観を持てない人への「リスペクト」をさり気なく持ち合わせると、より多くの共感と支持が得られ、新たな可能性が開かれていくのではないかと思う。閉塞感の強い時代だからこそ、今まで十分な光が当てられて来なかった視点---女性、地方、農業、無駄、スローな生き方、足るを知る、共生(ともいき)---に敏感に反応する感性を磨いておくことがとても大切。東海生こそこうした視点を豊かに膨らませて、社会変革へと結実させてくれるのでは…と期待している。

常にポジティブな考えを注入。ユーモアたっぷり。
ほめ上手。生徒をやる気にさせるのが上手い。

―今年から父母懇役員として参加して、より強く思うようになったこと、新たに思うようになったことは？

父母懇という組織の「懐の深さと熱」。四十年にわたってこの組織を支えて来られた方々の歴史と足跡が物語っていると思う。これまではもっぱら大垣地区の地域懇談会を中心にして関わり、地域の保護者の声に接する貴重な学びの機会という認識は持っていた。しかし、父母懇はもっと大きな地平で教員・生徒・父母そして社会をつなぐことを考えている。声を交わし合う接点をだれかが作り出さなければ、それぞれの日常のなかで完結し、振り返りや改善のチャンスは訪れない。父母懇は近くの集まりに参加する一歩さえ踏み出せば、いろいろな情報や経験にアクセスできる。その機会を通じて、人が育つことはタテ・ヨコの多様なつながりの中で起動していく営みでもあると私自身実感している。同時に、社会に生きるすべての人が必ず恩恵を受ける「教育」という場の価値を再確認し、より望ましい環境を整える社会的使命を共有する場でもあると思う。そして、教育の豊かな安定こそが、将来の日本、世界を支える主体を生み出す礎になる---だからこそ、さまざまな機会をとらえて教育や社会情勢に関心を持っていただき、署名運動などの各種活動を通じて、その熱を伝えていくことが大切なのではないか。自分の視界に入るものだけで完結しないで、より広く長い射程で教育をとらえる視座を提供していただいたことに、父母懇活動の意義とやりがいを感じている。

BIGフェス前夜祭パレード

今年度は海外研修をオンラインで
―ニュージーランド研修

本校の海外研修は2003年に産声を上げ、ニュージーランド（以後 NZ）研修は２０１０年から開始。今年で12回目になる予定。海外研修委員会の伊藤達矢先生と、以前東海に勤めていたNZ出身のコリン・フィップス先生が現地で研修をする可能性を探ってくださり、北島のタウポという街から始まった。NZの一番の魅力は自然。英語ありきではなく、五感を使った体験を通して、自然と英語が出てくるような場面設定をしている。そこにNZならではの多文化「共生」の視点を盛り込んでいる。先住民マオリの伝統文化や価値観を大切にしている国家で、国歌の歌詞も一番はマオリ語。「ハカ」と呼ばれるマオリのパフォーマンスを見るだけでなく、現地の学校とも交流をして「スクール・ハカ」を見せてもらったり、鼻先を合わせるマオリ式挨拶で歓待を受けたり、逆にこちらからもプレゼンを披露したりなど、体当たりの交流を行ってきた。ホームステイもあり、生の体験を重視したプログラムになっている。

タウポのアート・カフェにて
自然の中にアート作品が
溶け込んでいる

―NZ から学ぶべきこと

実のところ、最初から強い思い入れがあったわけではなかったが、以前視察で実際にNZに行って色んな学校を回らせてもらった際に、日本が学ぶべきことが山ほどあることに気がついた。自分の興味関心と近い部分もあったが、それ以上に先住民を大事にしている社会のあり方に感心した。NZほど先住民と白人が上手く融合している社会は他にはないと言っても良い。世界で最初に女性に参政権を与えたのもNZ。女性、先住民、マイノリティ、社会的弱者に対して尊厳を認め、手を差し伸べている。そういう価値観を大事にする考えが国の隅々まで行き渡っている。そして原発ゼロ。エコな社会を先取りしている。日本は経済・テクノロジーは発達しているかもしれないけれど、社会が成熟しているかというと、格差が大きく、歪な同質性（同調圧力、横並び）を求めすぎるところがあると思う。社会の狭さ・生き辛さの問題に対する解決法を、NZは実践しているように思う。

公立学校訪問での交流イベント

―NZ のコロナ対策

NZはほぼコロナを制圧して、かなりノーマルに近い生活を送っている世界でも稀な国であり、こんな時期だからこそ、オンラインとなってでもNZ研修にこだわった。ESLセッション（ネイティブ講師による英語レッスン）でNZならではの対策を学び、現地の大学生とで予定しているリアルタイムチャットでは、市井の人々がどうやってコロナ対策に適応していったのかを感じ取ってもらいたい。世界で対策が評価されているのは女性リーダーの国が多いが、とりわけアーダーン首相が早い段階から入国規制、外出制限などの厳しい措置（ロックダウン）に踏み切る際に国民に向けて行なったスピーチは、コロナの現状を分かりやすく説明し、国民に寄り添うような姿勢が共感を得て、国をあげての協力をとりつけた点で素晴らしかった。逆に上から押さえつけるような政策をしてきた国は失敗している。そういう比較をする中でいったい日本はどうしたら良いのかを考えるきっかけにしてほしいと思う。

―オンラインになって

ワイカト川でリバーカヤック

元々の体験重視型をそのまま残しつつ、この時期ならではの要素を新たに組み込んだ。確かにホームステイや観光のようなものはバーチャルでは現実感が薄れるという懸念はあったものの、ホストマザーには現地のネイティブの英語教師を何人か用意していて、その方の家にオンラインで招き入れていただき、NZと日本のライフスタイルの違いなどをお互いにその場でやりとりできるようにした。バーチャル観光も同様に、現地の案内人と共に、季節が反対のオークランドの街を見ながら双方向のやりとりができる。NZの「いま」を感じてもらえるようにデザインしている。

トンガリロでトレッキング

―オンラインプログラムについて

企画会社が提案してきたものではなく、東海オリジナルのNZ研修で大事にしてきた「交流」ができる方法をとり、そしてコロナ対策の点をガッツリ盛り込むプログラムとした。

例年、NZ研修に参加する生徒には英語が好きなタイプは案外少なく、NZでアウトドアができるなら楽しそう、夏は部活で行けない運動部体を動かして楽しめることを理由に応募してくることが多い。海外に行けば自分の英語の力の至らなさに直面し、失敗を山ほど経験する。でも、自分の不甲斐なさに直面する経験は、特に若いうちは大事だと思う。

ホストマザー＆ファーザー

またホストファミリーは親切な方が多くて、今でもメールでのやりとりや家族へのクリスマスプレゼントを送ってきてくださることもある。NZの人々の温かな心遣いに感じ入ることが多い。

（1）NZ 研修参加者の感想

僕にとって今回の研修は自分探しの旅でした。参加した理由は将来進むべき道に迷い、海外の同世代の子供たちがどのような教育を受け、どのような生活

を送っているかを体験し、将来に向けて視野を広げたいと思ったからでした。今回のプログラムでは、現地の男子校で2日間授業を受けるという貴重な体験ができ、将来のヒントを得た気がしました。2日間、バディと2人ひと組になり一日色々な授業を聞いて過ごすので大変ですが、バディやクラスメートに興味を持って会話すると色々発見があります。海外に行って見ると価値観がまるで変わります。井戸の中で窮屈に暮らしている日本人が、井戸外(海外)に出て、広大な土地で充実した生活を送っている NZ の人々を見ると、日本人は働きすぎではないかと思うでしょう。あなたは「井の中の蛙」になっていませんか。　　（田中　康介）

タウポの公立学校にて

―アメリカ研修

アメリカ研修は宮地邦樹先生(高校英語科)が熱い思い入れを持って立ち上げられた企画。この研修はNZ研修とは毛色が違って、「自分とは何なのか?」という自分を改めて掘り起こすところから始める。本当に自分がやりたいことは? 自分が生きる社会にはどんな問題があって、それを具体的に解決するとこれからの社会がどんな風により良いものになるだろうか? といったことを自分の中で突き詰めて考える。そこで見出した問題解決方法や新たな価値を、現地で企業家などにぶつけ、そのフィードバックをもらい、その質を高めていく、とてもイノベーティブな内容。事前研修では社会が抱えている問題を一つ選び、その問題解決方法のアイデアを練って、現地でさらに磨き上げてプレゼンする。シリコンバレーの企業を訪問したり、スタンフォード大学の先生の話を聞いたりする中で、自分は将来何をするかを掘り下げて考えるのを目的としている。

2021年3月 東海中学3年生、高海高校1・2年生対象

春季アメリカ研修　オンライン実施のご案内

世界に変化を起こす

グローバルリーダーへの一歩を踏み出そう！

~オンラインで無限の可能性を~

2020 春休み期間中 オンライン特別研修

~プログラムミッション~

・アメリカの有名大学や研究機関で活躍する日本人研究員による特別講座！

★工学/医学分野の知識やキャリアについて学ぶ

・アメリカ人大学生とキャリアビジョンについて学ぶ

・英語でのプレゼンテーションスキルアップ

・日本語を学ぶアメリカ人高校生との世代交流

特別セミナー　エネルギ・医療系のプロフェッショナル講師 ディスカッション

メンターワーク　現地の大学生メンターとのプレゼン練習

異世代交流　アメリカ人高校生とのプロジェクト交流

~プログラム詳細~

日程：3/20(土)、3/22(月)、3/23(火)、3/29(月)の4日間（※各日3時間サーバ時間）

構成：不安定な中の新型コロナの感染拡大状況によっては当初からの変更

対象：中学3年生～高2年生

定員：20-30名（※応募者多数の場合は選考）

費用：38,000円　　担当教員：宮地邦樹（高校英語科）

~事前学習~

(1)オンライン英語基礎問題受講（※必須で提出受講）

(2)研究員の研究テーマについて調べ学習・練習の準備

(3)大学生とのディスカッション準備

(4)各自テーマに沿ったグループプレゼン準備

(5)自己紹介動画の作成

1日目(3/20)
9:00-10:30 大学生とディスカッション
テーマ：将来の「働くこと」の違い
10:30-11:30 現地大学生とプレゼン準備

2日目(3/22)
一般講座～
海外大学の研究員による特別講義（中学生）
9:00-10:00 特別講義(工学系)
10:05-11:00 特別講義(医学系)
11:05-11:30 特別講義総括

3日目(3/23)
9:00-10:30 日本語学ぶアメリカ人高校生と交流
10:30-12:00 現地大学生とプレゼン準備
プレゼン動画仕上げ

4日目(3/29)
9:00-11:00 研究員/大学生/高校生に向けたプレゼン発表&フィードバック
11:00-11:30 全体総括(振り返り)

※当研修実施については多分に関係の大学や現地の状況等により内容・プログラム内容が変更される可能性があります。

●説明会詳細●

(※応募用紙を記載するので、聞くのある人は必ず参加してください。)

(※2回とも説明会の内容は同じですので、いずれかに参加してください。)

【第1回】1月12日(火)15:40～16:40

【第2回】1月20日(水)15:40～16:40

場所：スタディーホール

▼ライブ配信申し込み

※説明会は生徒のみ対象です。

※説明会当日はオンラインにてライブ配信をいたします。

1/10(日)23:59までに右記QRコードからお申込みください。

※セキュリティ強化のためお申込みいただいた方のみ招待メールをお送りします。

~雑感~～

コロナの影響で、非常に辛い日々。

学生生活での貴重な時期でありながら海外研修中止、とんな悔しい気持ちを抱いてきたでしょうか。

今後の新しいオンラインスタディツアーなるものです。いつもと違う時間が120%楽しいです。学ぶ、意見交うこれもできない貴重な方々からの情報を聞き、ともに切磋琢磨しあいます。

ご参加お待ちしております！

運営会社：webiio株式会社

ゴールデンゲートブリッジにて

(2) アメリカ研修参加者の感想

「グローバルリーダー研修」に参加して最も強く思ったことは「英語を使って、コミュニケーションやプレゼンテーションをすることはこんなに楽しいんだ!」ということです。この研修中、街中や企業家の前など様々な場面で英語を使う機会がありました。その中で、インタビューした街中の人が僕の間違って使ってしまった表現を優しく指摘してくれた時には、自分は必死に伝えようとしていて、相手も全力でこちらの話を理解しようとしてくれていると感じ、とても印象に残っています。この研修では英語力向上はもちろんのこと、僕は協働して課題に取り組む力を大きく伸ばすことができました。人によって得られる体験もそれから感じることも全く違いますが、これらの経験は普段の生活では得難いものなので是非参加してみてください。
（青地　瞭太）

スタンフォード大学前庭「オーバル」にて
パーム・ストリートを背景に

海外研修お問い合わせ先

NZ 研修　　：北村　雅臣先生（高校英語科）
アメリカ研修：宮地　邦樹先生（高校英語科）

編集後記

北村先生を一言で表すなら、間違いなく「熱血」です。ところがその言葉のイメージとはうらはらに、なんでもサラリとスマートにこなし、威圧感などゼロ。紳士的なほほ笑みで、こちらが欲しいと思う言葉を先回りして的確に伝えて下さり、大きな余裕を感じました。お話を伺って思うに北村先生は今まで経験してきたことを何度も振り返り、全て吸収し蓄え、未来へと活かそうというお気持ちが人一倍強いのではないかと。まるで「青い炎」のような方だと私は思いました。